

(1)

かわら版

# 哲学たいけん

平成4年5月31日

創刊号

編集発行／碧南市企画部

哲学たいけん村

無我苑

所在地／碧南市坂口町 3-100

〒447 : TEL 0566-41-8522

; FAX 0566-41-7761

## 哲学たいけん村

## 無我苑開村

平成4年6月

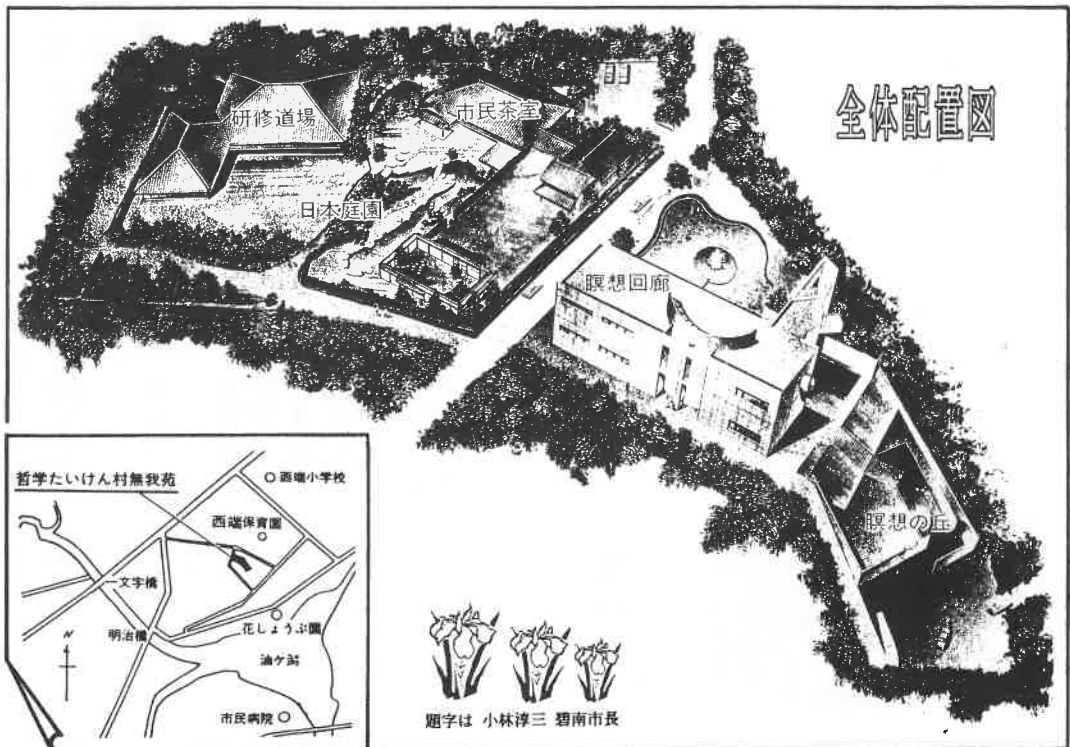
伊藤証信翁のゆかりの地に

こころの健康と精神文化醸成の拠点として  
愛知のふるさとづくり事業に選定され、平成  
二・三年度継続事業で、坂口町地内に建設を  
進めていました「哲学たいけん村無我苑」が  
このほど立派に完成しました。

この事業は、日本全土に向けて「無我愛」  
を主唱し、この地に居を構えた哲学者・伊藤  
証信翁のご遺族より土地等を市へご寄贈頂い  
たことから、その利用方法を検討した結果、  
静かな環境に身を置いて心を落ちつかせ、心  
の安らぎを得て頂くと共に、諸々のストレス  
を解消し、みずからの人生を振り返って考え、  
明日への活力を湧きおこして頂くための施設  
として建設しました。

各施設的设计には、瞑想回廊を若山滋氏、  
市民茶室を中村昌生氏、研修道場を横内敏人  
氏に各々お願いしました。

また、名誉村長に哲学者の梅原猛氏、村長  
代行・顧問に久野昭氏のご両氏をお願いし、  
ご就任頂きました。



題字は 小林淳三 碧南市長

# 「哲学たいけん村」無我苑の完成を祝して

碧南市長 小林 淳 三



設してきたもので、ハイビジョンなどを備えた瞑想回廊、本格的な市民茶室「湧々庵」、立礼茶室を持つ研修道場「安吾館」、日本庭園を配しております。

「碧南市哲学たいけん村無我苑」が、6月から開村することになりました。

現在の日本は、物質的にはたいへん豊かになり、私たちはそれを享受して

この施設は、「無我愛」を説いた哲

者伊藤証信の哲学研鑽の場「無我苑」を

ご寄付いただいたことが契機で、「心の

過多の生活などの現状を見ると、現代こ

健康と精神文化の醸成の場」を基本テー

そ原点に戻って自分というもの、生きていくことの意味を考える時といえます。

マに、哲学を体験し、ストレス社会にも対応する、全国的にも例のない精神文化育成の場として、梅原猛名誉村長さんを始め多くの先生方のご指導を得ながら建

この碧南の地から心の時代の情報を全国に発信するため、小粒でも一味違った企画と運営をしていきますので、皆様のご指導とご支援をお願い申し上げます。

## 開村までの経緯

平成元年

- ・ 1月 無我苑の土地建物の寄付を受理
- ・ 2月 庁内利用検討会設置し検討開始
- ・ 2月 無我苑整備市民会議を設置し検討開始
- ・ 4月 伊藤証信展、記念講演会を文化会館で開催
- ・ 8月 利用検討会、市民会議から検討結果の報告を受ける
- ・ 10月 愛知のふるさとづくり事業に哲学たいけん村無我苑整備計画を申請

伊藤証信翁が無我愛主唱の拠点とした無我苑は全国の共鳴者の浄財によって、現在のところへ昭和9年12月18日に新築落成した。▼写真



## 「哲学たいけん村」のオープンにあたって

名誉村長

梅原

猛

国際日本文化研究セン  
ター所長・哲学者

碧南市の「哲学たいけん村」が、いよいよオープンすることになった。これは伊藤証信氏の「無我愛」の道場を碧南市が譲り受けた縁で設立されたものであるが、碧南市は他に清沢満之という大哲学者を生んだ町であり、「哲学たいけん村」を作るのに誠にふさわしい場所といわなければならぬ。

その名誉村長に私が地元出身のよしむで就任したのであるが、これはタイミン

グ的にも誠によかつたと思われる。というのは、今、世界は一大転換点で、地球環境の破壊などにより新たな哲学が求められている。戦後の日本はもっぱら経済成長のみを心がけてきたが、この高度成長の時代においては、哲学は全く無用の長物であった。今はしかし、政治や経済すら哲学を必要としている。このように哲学が求められるときに、西洋哲学の伝統とともに東洋の哲学の伝統が顧みられざるを得ないのである。伊藤証信や清沢満之の精神が今また甦ってくる。

その点で、この「哲学たいけん村」のオープンには名誉村長として強い期待をもっているのである。

・ 12月 愛知のふるさとづくり事業に哲学たいけん村無我苑整備計画が選定される

平成2年

・ 2月 整備計画に基づき隣接地買収完了

・ 5月 瞑想回廊の設計委託

・ 6月 研修道場、市民茶室、日本庭園の設計委託

・ 7月 平成2年度自治省地域づくり事業の指定を受ける

・ 10月 ハイビジョンシステム設計、哲学ソフト等基本構想を委託

平成3年

・ 1月 哲学たいけん村無我苑名誉村長に国際日本文化研究センター所長の梅原猛氏就任。また村長代行顧問に同センター哲学教授の久野昭氏就任

・ 2月 合同起工式を現地で行

平成4年

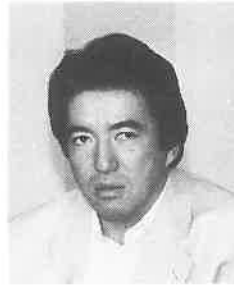
・ 5月 竣工式、市民茶室（湧々庵）の茶席開き、ハイビジョンギヤラリー・オープニング、名誉村長記念講演会を開催

・ 6月 開村

# 哲学という機能

## 若山 滋

(名古屋工業大学教授)



不思議な建築を設計することになったものである。

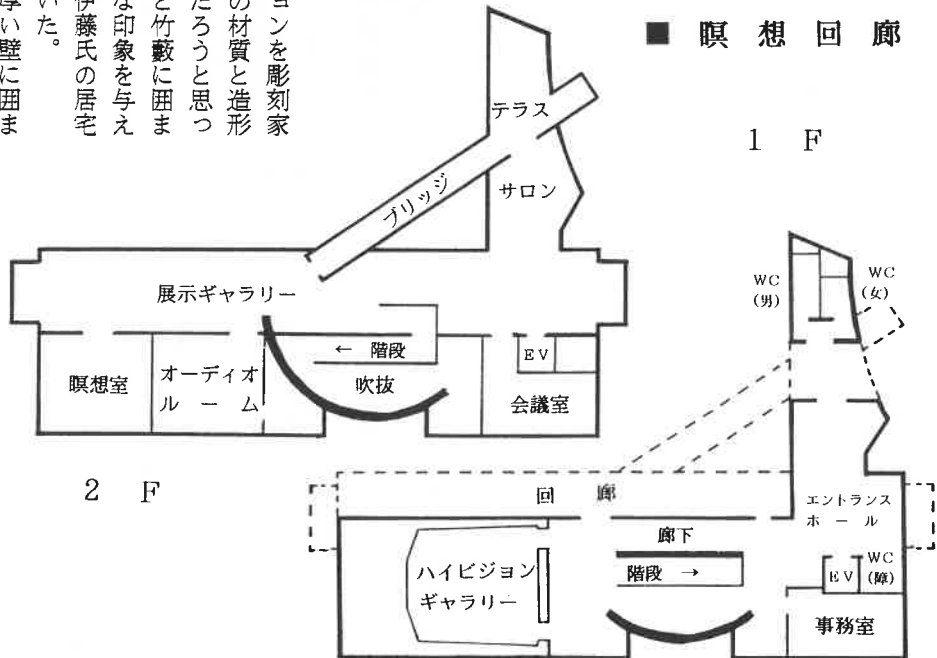
哲学者・伊藤証信氏の遺族の寄贈による、哲学を体験する施設であるが、実際の瞑想や行為の場は、和風建築で造られる研修道場や茶室の方であるから、この瞑想回廊は、伊藤氏関係の遺物や思想の展示、ハイビジョン・ホール、及び科学的な心身のリラククス設備という機能が与えられた。つまりそれほど瞑想的な空間ではないのだ。

回廊という名前から私は、アプローチの前庭と建物で囲まれた後庭とを中心に、外と中を自由に行き来し、とにかく歩き回りながら何かを考えるような空間を造りたいと思った。前庭は、コンクリートと芝生に囲まれたハ-



ドな空間に置くインスタレーションを彫刻家の清野祥一氏にお願いした。彼の材質と造形が見るものに何かを考えさせるだろうと思っただからだ。後庭は、建築と植栽と竹藪に囲まれた空間に水を配して、柔らかな印象を与えようとした。水の流れる底には伊藤氏の居室に使われていた瓦をそのまま敷いた。

内部は、大きなカーブを描く厚い壁に囲まれたトツブライトのあるホールを中心にして各部を結びつけている。あえて展示室というものを造らず、主として二階のトンネルのよ



うな廊下を、遺物や哲学の紹介を展示する、展示機能に当てている。

# 茶室に露地囲い

## 中村 昌生

(京都工芸繊維大学名誉教授)



茶の湯は本来、物外の境地での「遊び」である。すなわち山居の主人が親しい友を招き心をこめてもてなす遊びである。茶室は主人(亭主)の住まいであり、山居の趣を深めるべく露地という庭がつくられる。こうした茶の湯は精神性の深い生活文化として完成された。哲学たいけん村に茶室と庭が組み入れられたゆえんである。

この茶室は、茶事の研修が出来ることを基本とし、今日の大寄せの茶会にも適応でき、かつ来苑者への日常的な呈茶もなしうるよう計画されている。

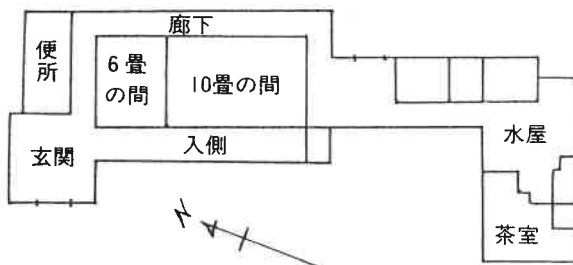
玄関・広間棟と小間棟とが廊下で繋がれている。広間は主室と次の間六畳から成り、庭

に面して入側(畳縁)を付している。主室は十畳敷、正面に床と地袋及び琵琶台をそなえる。千家流の七事式もおこないうるよう構成されている。間仕切の欄間には「涛々庵」の名に因んで、波の図案の彫刻を嵌めている。襖紙は、京都の唐長の板木で摺られたものである。

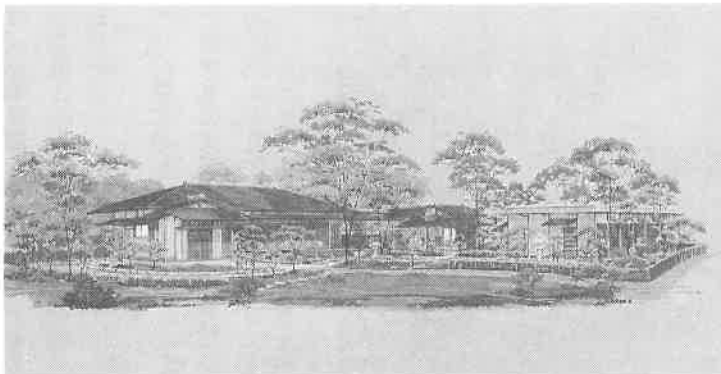
小間は草庵風の茶室で西向きに建てられている。四畳敷に上座床を構え、点前座と客座の間に中板を入れ、中柱を立て、炉を台目切とした四畳台目中板入にしている。茶道口と給仕口、躰口と二枚障子の貴人口が開かれ、特色ある間取りが工夫されている。二方に深い土間庇をめぐらし軽快な外観を形づくっている。

南へ内露地がつくられ、内腰掛と砂雪隠が設けられる。腰掛の間の中潜の向うが外露地である。この外露地は高い扉で囲まれた珍しい構えである。このような外露地は古田織部と弟子の上田宗箇が試みていたことが知られている。茶会に招かれ

た客は、まずこの囲いの中の腰掛に集うのである。囲われたこの一境は、世俗を超えた清々しい雰囲気漲り、客も心が洗われ、お互いに「直心ノ交リ」を固めることが出来る。これから始まる茶会に臨むための大切な心の準備を整える「聖」なる空間である。茶の湯を通じての哲学的体験の施設として特にこの形式を取り上げた。



■ 市民茶室 涛々庵



# 安吾館の設計

## 監修にあたって



横内 敏人

(京都芸術短期大学)  
京都造形芸術大学講師

安吾館には二つの主な機能が要求された。一つは集会施設として市民のさまざまな催しや集いの場を提供すること、もう一つは哲学たいけん村を訪れた人々が、休憩のため立ち寄れる場をつくることであった。

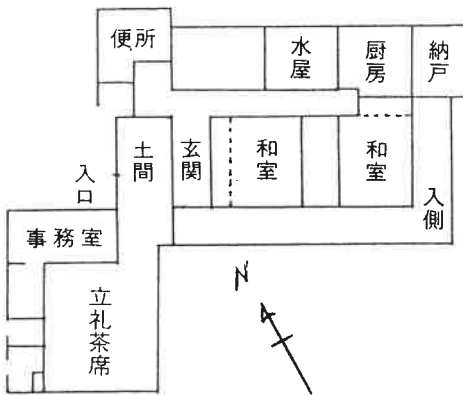
これらの機能は、それぞれ広間と立礼茶席という形を取り、隣接する日本庭園に対し、最大限の開放性を持つよう、雁行した二つの大屋根の下に収められている。

広間は二つの十畳間が軸の間を挟んで隣り合う構成となっていて、それらを仕切る障子と襖をすべて取りはずすと、畳敷の入側まで

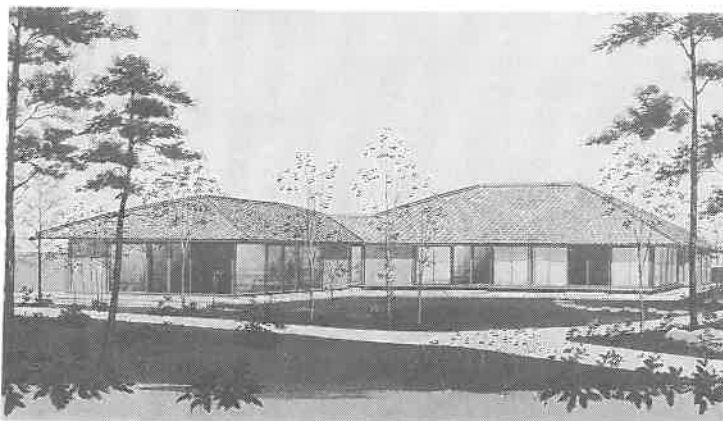
ふくめ四十二畳の大広間となり、百名程度の集会が出来るようになる。また庭園に面する入側のガラス戸・障子は、すべて襦壁に引き込むようになっていて、季節に応じて、さまざまな庭の自然を楽しむことが出来るはずである。

西の十畳間の襦唐紙は三河湾の穏やかな海を、東の十畳間のそれは風にたなびく三河平野の稲穂をいずれも抽象的な文様で表現しており、立礼茶席の洞床の形は向い合う瞑想回廊の二階展示室出窓の形と呼応している。

この建物は、大工・屋根・左官・建具・設



### ■ 研修道場 安吾館



備、すべて地元の職人達の手によって見事に完成したが、この仕事を通じて今日でも脈々と生きづく三河職人の心意気と腕の確かさを見せていただき非常に嬉しく思った。

最後に、この建物の完成にご協力いただいた多くの方々に心より感謝の意を表したい。

## 「哲学たいけん」

## のために



村長代行  
久野 昭

(国際日本文化研究  
センター教授)

「哲学たいけん」は可能なのか

哲学それ自体は、ひとつの、しかも特殊な学問である。その哲学という学問は、一般人達にも体験可能なのか。これは、わが「哲学たいけん村」ととっては、基本的な問いである。なぜなら、もしも哲学が一般の人達には体験できない学問ならば、広く世間に開かれた形で構成された「哲学たいけん村」そのものが、はじめから無意味になってしまうからだ。

逆に、もしも体験できるとしても、哲学のどのような面で、どのような意味で「哲学たいけん」が可能なのかを、はっきりさせておかなければならない。

そのためには、先ず「たいけん」(体験)が

他のさまざまな経験とどう違うかについて、ついで「哲学」が他のさまざまな学問とどう違うかについて、述べておくべきであろう。

## 「たいけん」

私達の生活は経験の連続であるといつてもいい。なにかを見たり、聞いたり、なにかに触れたりするのも、経験である。街を歩くのも、室内で仕事をするのも、食事をするのも、眠るのも、経験である。ほとんど無意識的な経験もあれば、はっきり意識しての経験もある。誰かがなにかを教えこもうとして私達に仕向けるような経験もあれば、また、私達がなにかを学ぼうとして、自分の方から求めるたぐいの経験もある。なにかを経験しても、すぐに忘れてしまったり、はじめは覚えていても、いつのまにか記憶から去ってしまったり、あるいは逆に、いつまでも忘れられなかったり、忘れているようでも、不意に思い出したり、経験の深さ、あるいは重さも、さまざまである。

そのさまざまな経験のなかでも、自分の心の深いところで受け止められ、自分自身の考えかた、生きかたになんらかの影響を与えるような経験、自分の人生にとってなんらかの意味を持つたぐいの痕跡を心に残すような経験を、とくに他のいくつもの経験から区別して「体験」[*Erlebnis*]とよぶ。

とすれば、人それぞれが心の深みで、自身にかかわる事柄として哲学を体験できるかどうか、「哲学たいけん村」の成否のわかれめになつてくる。

## 「哲学」

では、はたして哲学は、一般の人達にとつても、自分自身にかかわる事柄たりうるのだろうか。

たしかに、哲学それ自体は、ひとつの、しかも特殊な学問である。しかし、哲学が追究しようとしている真理は、実は、人間として生きていくすべての者にとつて、だから一般人達にとつても根本的な事柄、自分自身の存在の根幹にかかわるような事柄なのである。

その自分自身の根幹にかかわるような事柄は決して、その全部を外部にさらけ出してみせることはできない。客観化し対象化しきることとはできない。

一般に学問とは、真理の追求である。それぞれの学問が、それぞれの学問上の真理を追究しつづけている。そして、その真理は、いつでも、どこでも、誰にとつても通用するはずの真理として、客観的に証明された形で主張されるのが、そして、もしその証明に間違いがあれば、もはや真理たりえないというのが、いわば常識である。その常識は、それぞれの分野での客観的な、普遍的な真理の追求こそ

が学問の使命だと認めることを、前提として  
いる。

ところが、哲学の場合は、必ずしも常識ど  
おりには行かない。哲学の追究する真理は、  
客観的証明を必要不可欠な条件とはしない。  
それは、むしろ、人が主体的に納得すべき真  
理である。

だから、哲学的な真理は、客観的な知識と  
してよりも、主体的な思想として主張される  
ことになる。思想は本来、客観的であるより  
は、主体的なものであり、主体的なものは客  
観化しつくせないからだ。そして思想につい  
ては、つねに、それが誰の思想かが問題にな  
る。知識は万人にとつての知識であるべきだ  
が、思想には万人の思想などというものはな  
い。思想は、人それぞれの主体によつてのみ、  
主体においてのみ生きる。

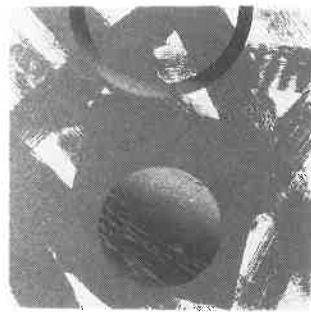
もちろん、哲学にとつても知識は必要であ  
る。客観的な知識、とりわけ哲学史上の客観  
的知識を無視して、哲学的な思想を主張する  
ことはできない。しかし、知識をいかに積み  
上げてみても、それだけでは思想にはならな  
い。その点でも、哲学は特殊な学問である。  
世間から哲学の専門家と思われている人達の  
大部分は、実は哲学史家、つまり哲学でなく  
哲学史の専門家にすぎず、哲学史に名を留め  
ている個人の思想についての知識を積み重ね  
ているだけか、その種の知識を切り売りして

いるだけであつて、自分自身の体験に裏付け  
られ、自分自身の思想として形成された哲学  
をもつてはいない。

その自分自身の思想としての哲学を裏付け  
るべき体験という面で、また、おそらくその  
面でのみ「哲学たいけん村」の意図する「哲  
学たいけん」の地平が開ける。体験はまぎれ  
もない自分自身の主体的な体験であつて、他  
人の体験ではない。その自分の体験を大切に  
しながら、しかもその体験をもとに自分自身  
で考えることを始めたとき、その人はもう哲  
学の入口にいる。それが「哲学たいけん村」  
の村民の資格でもある。

#### 「哲学」的な「たいけん」

できあがつた思想体系だけが哲学のすべて  
ではない。哲学者が自分自身の思想を形成す  
るきっかけ、あるいは推進力になっている体  
験を、どのように自分の思想のなかに生かし



ていくかも、哲学の枠内の問題である。

隙間なく緻密に、理詰め形成された体系  
だけを哲学だと思つるのは、間違ひである。そ  
れよりも哲学にとつて先ず必要なのは、哲学  
的な問題意識が体験のなから芽生えること  
である。そして、哲学的な問題意識に連なる  
ような体験それ自体は、無論、決して理詰め  
のものではありえない。理性的であるどころ  
か、きわめて感性的なものだ。感性を欠いた  
哲学などというものは、存在しない。むしろ  
哲学的な問題意識を抱くことの出来るような  
感受性を磨くことが、哲学の第一歩なのだ。  
それなくしては、哲学的な体験もありえない。

哲学という学問が始まつたのは、古代ギリ  
シアにおいてだったが、この学問の名前は、  
もともとギリシア語では「知を愛すること」  
「知恵への愛」を意味した。愛も、断じて理  
詰めのものではない。 *Philosophia* (哲学)  
は、感性と密接に結び付いている。

そのことをはっきりさせるために、ここで  
哲学的な体験たりうるものを、大雑把に三つ  
にわけて取り上げておきたい。第一に驚き、  
第二に疑い、第三に不安である。

#### 驚き

「不思議に思うこと、この感情は哲学者の  
ものである。哲学には、これ以外の起源はな  
い」と古代ギリシアの哲学者プラトンは言っ



た(プラトン『テアイテスト』)。この不思議に思う感情を、「驚き」とよんでもいい。

その驚きの対象は、なにも、誰もがびっくりするような奇怪なものでなくてもいい。むしろ、誰も不思議に思わないような、ごくありふれた事物についても不思議に思う、驚くというような感受性が、哲学には必要なのであり、その驚きとともに哲学が始まるのだ。

プラトンと同じく古代ギリシアを代表するもうひとりの哲学者アリストテレスが、こんなことを言っている。「なるほど私達の知恵の原初的な源ではあるが、しかし私達に決して、なぜ何かがかくあるのか(例えば、なぜ火は熱いのか)を教える(これは知恵の仕事である)ことはできず、ただ何かがかくあるということしか教えられない感覚と、知恵とを同一視してはならない」(アリストテレス『形而上学』)。つまり、感覚は火の熱いことは教えてくれるが、なぜ火が熱いかは教えてくれない。「なぜ」という問いに答えてくれるのは知恵である。感覚もたしかに経験のひとつとして知恵の出発点にはなるけれどもそれだけでは駄目で、知恵への愛が「なぜ」という問いの形で出てこない、哲学にはならない。そう理解していいだろう。そして、「なぜ」と問うのは、無論、不思議に思ったから、驚いたからであり、「なぜ」と問うとき、人はもう考えは始めている。

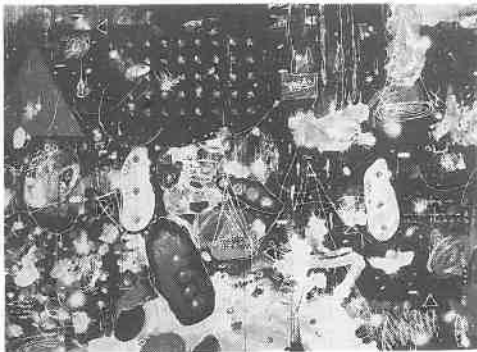
### 疑い

「プラトンやアリストテレスの議論をすべて読んだとしても、示された事物についてしつかりした判断を下すことができないければ、我々は決して哲学者とはならない」(デカルト『精神指導の規則』)。

自分に提供された情報、自分の得た知識をただ無批判に受け入れていただけでは、哲学にはならない。それが自分の心から納得できる知識かどうかを、自問することが必要である。その自問は、例えば近代的な諸科学の成果としての知識が蓄積されてきた十七世紀、デカルトによって「懐疑」という形で提起された。自分の得た知識や、自分がその知識を得るのに動員した認識能力等を通じて、彼はすべてを疑ってもなお疑いきれないような確実な真理に到達しようとした。

「私が、すべては偽りであると考えようとしている一方、このように考えている私は、当然なものかでなければならぬ、ということに注意するやいなや、《我思う、ゆえに我在り》という真理が、懐疑主義者の最も無茶な仮定の一切をもつてしても動揺させられないほど堅固で確実であることに目をつけ、私はこの真理を自分の求める哲学の第一の原理として、なんの心配もなく認めることができる」と判断した」(デカルト『方法叙説』)。

ここで疑われているのは、単に自分の外にあるものだけではない。そもそも自分という人間が本当に存在するのかも、疑ってみていい事柄なのだ。それに、自分の外にあるものも、自分自身にかかわってくるものとして、自分自身にかかわりのある限りでこそ、「疑い」の対象になっている。つまり、この「疑い」そのものが、自分の存在にとつて切実な問題であり、さもなければ、それは哲学的な意味を持ちえない。そして、そのような「疑い」が切実な哲学的体験として、自分自身の思索を動かすことができるだけの感性がなければ、その人は、ただ疑うために疑っているだけの、たんなる懐疑主義に陥ってしまうだろう。



## 不安

このデカルトのような疑いを抱いたことのない者でも、ふと自分自身の死を思つて、不安にとらわれた経験はあろう。ただ、それがいかにもやりきれない不安なので、それが体験として自分の心に痕跡を残すのを惧れて、すぐに、そのような不安を、また、その不安の種を忘れようとしたのではないか。

けれども、「死を前にしての不安は、最も固有の、他と関連のない、追い出すことのできない存在可能を前にしての不安である」(ハイデッガー『存在と時間』)。

人間は生きていく限り、さまざまな可能性を持つている。そのすべての可能性が一挙に不可能になつてしまふ可能性、それが死であろう。そして、他ならぬ自分の持つている、この死の可能性を、生きていく限り、人間は追い越すことも、追い出すこともできない。それが人間を不安にする。「不安が、無をあらわにする」(ハイデッガー『形而上学とは何か』)。

そのような不安を忘れようとするのではなく、逆に、この不安を体験として自分に引き受けるのも、哲学の入りに口である。なぜなら自分が死すべき者として生きていくことが、自分自身にとってどのような意味を持つていくかは、哲学上の大きな、しかも基本的な問

題だからだ。ただし、この自分自身の死にかかわる不安から眼をそむけないためには、それなりの勇気が要るはずである。

## 「哲学たいけん」のために

体験というものは、他人に代わつてもらふことはできない。他人にどこまで伝えることができるかも、疑問である。理屈なら、他人に教えることができる。しかし、体験は理屈ではない。どうしても外に表現しきれないところが残るし、その残つたところが、かえつて、自分にとっては大きな意味を持つていくはずなのである。



自分の心にかかわる主体的な事柄として哲学をとらえるべきだという前提に立つて、そのような心に訴える「哲学」的な「たいけん」への導入、あるいはその「たいけん」を媒介としての思索のための示唆を、できるだけ効果的に提供したい、というのが、この「哲学たいけん村」の哲学部門の構想の基本であった。現代のあわただしさが習慣化してしまつていく日常生活のなかでは容易には得がたい「哲学たいけん」が、各自の心に訴えかけることで、それぞれの生きていく意味をあらためて考える機縁になれば、というのが、この哲学部門の構想に当たつての願いであった。

ただし、体験というものは、他人に代わつてもらふことはできない。他人に押し付けるべきものでもない。体験するのも、その体験を生かすのも、他ならぬ自分自身である。だから、この「哲学たいけん村」でどのような「哲学たいけん」が可能か、また、その体験が今後にどのように生かされるかは、基本的には、この村を訪れる人それぞれにかかつていく。

その上でのことだが、この「哲学たいけん村」の発展のための新たな企画や改善の努力を、私達は惜しむつもりはない。そのために、御意見を遠慮なく哲学たいけん村無我苑事務所まで、お寄せいただきたい。

(挿入カット／鏗本達朗、杉浦イツコウ、玉田定)

# 碧南市哲学たいけん村無我苑の概要

名誉村長 国際日本文化研究センター所長 梅原 猛  
 村長代行・顧問 国際日本文化研究センター教授 久野 昭

## 施設の概要

場所	碧南市坂口町3丁目100番地 油ヶ淵花しょうぶ園、応仁寺 から西へ徒歩で約5分	・研修道場（安吾館） 木造数寄屋造り 平屋建 281.12㎡
敷地面積	4,476.62㎡	・日本庭園 外露地、せせらぎ等配置
苑内施設	・瞑想回廊 鉄筋コンクリート造り 2階建 550.27㎡	・開館時間 毎日 午前9時～午後9時 午前9時30分～午後4時 月曜日（月曜日が国民の祝日に当たるときは、その翌日） 及び12月28日～翌年1月4日
	・市民茶室（湧々庵） 木造数寄屋造り 平屋建 146.92㎡	・立礼茶席 ・休館日 3箇所 約80台駐車可能
		・駐車場

### ■ 瞑想回廊

監修指導 若山 滋(名古屋工業大学教授)

設計者 (株)篠田川口建築事務所

施工者 建築 (株)岡田組

電気設備 三新電気(株)

機械設備 (株)長谷川設備工業

ハイビジョン (財)NHKエンジニ

アリングサービス

ソフト監修 (株)NHK名古屋ブレインズ

### ● 主な設備

1階 ・展示ホール

・ハイビジョンギャラリー(19席)

・事務室

2階 ・展示ギャラリー

・ポデイトニック(4席)

・瞑想室(5席)

・会議室

### ● 施設利用の概要

・展示ホール、展示ギャラリー(2階通路部

分)では、著名な哲学者や郷土の偉人関係、

哲学的テーマ(驚き、疑い、思惟、生命、

死、宇宙等)を示唆する写真、絵画、立体

物などを展示します。

・ハイビジョンギャラリーでは、110イン

チの大スクリーンで鮮明な映像と前後左右

から流れるPCM音響による臨場感あふれ

る映像で、心を豊かにしていただけます。

・ポデイトニックの部屋では、レーザーディ

スクを、ゆったりとした椅子で環境音楽や

心に沁み入る音を体感できます。

潮の干満に応じた番組編成で話題の衛星音

楽放送「セント・ギガ」も体験できます。

・瞑想室は、もの思いにふける部屋。イタリ

ア、ルネサンス時代にメデイチ家に伝わる

「瞑想の椅子」を復元した椅子で、人生を！

自分を！考えてみましょう。

### ■ 市民茶室(湧々庵)

監修指導 中村昌生

設計者 (財)京都伝統建築技術協会

施工者 建築 (株)岡田組

電気設備 三新電気(株)

機械設備 (株)イタヤ

庭園 (株)むらやま

### ● 主な設備

・寄付 ・広間(6畳、10畳)

・勝手水屋 ・小間(4畳台中板入)

### ● 設備利用の概要

・月1回、市民のみなさんが参加できる茶会

(参加費四百円)を開催します。本格的な

茶室で、茶の湯の体験ができます。

・市民みなさんの茶会のための貸館としても

利用できます。

・日本庭園を配置します。

・哲学たいけん村にふさわしい、全国的にもめずらしい露地囲いがあり、外界と隔絶された静かな待合となっております。

### ■ 研修道場（安吾館）

#### 監修指導

横内敏人（京都芸術短期大学・京都造形芸術大学講師）

#### 設計者

河原建築設計室

#### 施工者

建築（株）岡田組  
電気設備 三新電気（株）  
機械設備（株）長谷川設備工業

器具（有）指立建工

### ● 主な設備

・立礼茶席（10席）

・和室（42畳）

・鞘の間（5畳）10畳2室の間の緩衝の間

・水屋、厨房

・事務室兼宿直室

### ● 設備利用の概要

・立礼茶席では、来村者に抹茶（お菓子つき一服二百五十円）を提供します。

・和室（42畳）は、貸館として利用できます。

・10畳単位か、42畳単位となります。

・10畳の2室は、それぞれ炉が切っており、茶道の研修道場としても利用できます。

・水屋、厨房も利用できます。

・ここは、哲学たいけん村自主事業の哲学・茶等各種勉強会や、文化交流事業の会場としても利用します。

## 哲学たいけん村無我苑利用方法

### ■ 施設利用案内（開館時間9時～21時）

#### 【瞑想回廊】

利用料金は無料

◇ハイビジョンギャラリーでは、碧南市制作のオリジナルソフト（へきなん、日本の名園、ヴェルサイユ宮殿、心象無辺～清碧・矢作川～等）から選択視聴できます。

◇リラクゼーションルーム（ボディソニック）では、環境映像のLDやCDの音楽を4台のボディソニックで視聴できます。

#### 【研修道場（安吾館）】

##### 貸出施設

各和室には炉が切っており、水屋もあります。古典の読書会、俳句の会など落ち着いた雰囲気の中で利用し、最後に立礼茶席で抹茶を楽しむのもいいものです。備え付けの茶道具もご利用になれます。

#### 【市民茶室（湧々庵）】

##### 貸出施設（茶会・茶事専用）

本格的茶室での茶会、迎賓茶会、もちろんグループでもお茶を指導されるかたとご一緒にお楽しみください。備え付けの茶道具もご利用になれます。

### ■ 安吾館立礼茶席で一服

◇営業日 無我苑開苑日

毎日午前9時30分～午後4時  
席数：10席

◇料金 一服：お菓子付き250円

### ■ 湧々庵茶会

◇開催日 毎月第4日曜日（12月のみ第3）  
午前10時～午後3時

◇場所 市民茶室湧々庵

◇呈茶料 一服400円

#### 《利用申込》

利用許可申請書に使用料金を添えて直接哲学たいけん村無我苑事務室（瞑想回廊1階）に申し込みください。利用予定日の3か月前から3日前まで受け付けます。

#### 哲学たいけん村無我苑使用料

区分	午前	午後	夜間
安吾館の一室	300円	410円	510円
安吾館の全室	920円	1230円	1540円
湧々庵	3090円	4120円	4120円

※ 午前は 9:00～12:00、午後は 13:00～17:00、夜間は 18:00～21:00の時間です。

※ 時間の延長した場合は、1時間につき使用料の20%増しとなります。

※ 営利目的等に使用の場合は別途料金を申し受けます。

（問い合わせ）

碧南市哲学たいけん村無我苑

☎ 0566-41-8522